

万両婿とひまわりの不思議

「万両婿」という落語がある。

人情噺「小間物屋政談」として世に出たのが始まりで、のちに講談になり「万両婿」となった。

さらにこれを、六代目三遊亭圓生が人情噺に戻して、サゲもつけたという。

現在では「小間物屋政談」として落語をやる人と、「万両婿」としてやる人がいるようで面白い。

江戸で背負い小間物屋を営む相生屋小四郎は、商売の繁盛を期して上方へ向かって旅立つ。

箱根の山を越えんとするところで、追い剥ぎに襲われて身ぐるみ剥がれて裸で路傍の木に縛りつけられている男を助ける。聞けばこの男は、江戸の小間物屋の本店若狭屋で箱根へ湯治に着ての帰り道で賊に襲われたと言う。小四郎は、自分の旅の荷物から出した着替えの着物と路銀として一両を貸し、住所と名前を書き記した紙を若狭屋に渡した。無事江戸に帰ったら一両を返しに行くとして別れた。

相生屋小四郎は上方に向かって長い旅、一方の若狭屋は家路につき、途中の小田原で一泊。

ところが若狭屋は、宿で突然病に倒れ、急死してしまう。宿が混雑のせいで、宿帳に書いてもらうのを失念したため、急死の旅人の素性がわからない。やむなく荷物を一品ずつ調べてみると「京橋五郎兵衛町相生屋小四郎」と書いた書き付けが出てきたので、死者の住所・氏名であると判断した宿屋は、一刻も早く留守宅に知らせてあげなければ・・・と奔走。

遺体確認に来た家主と店請人の二人は、相生屋小四郎から借りた着物を着ている死人と書き付けを見て、小四郎の死を確認する。そして火葬を済ませた仏を持ち帰り留守宅に届けた。

相生屋の妻が嘆き悲しんだのは当然ではあるが、そんなこととは露知らず、小四郎は上方で商売に励み続けた。小四郎を失った相生屋の妻は、男手が必要なため、家主の勧めでいこの男と再婚する。しばし時が流れて、上方での一仕事を終えた相生屋小四郎が、長い道のりを経て京橋五郎兵衛町の自宅に帰って来た。そして・・・

というような、サスペンスドラマに出てくるようなスリリングな出来事が起きてしまうのだが、これ以上書くと、落語を見る（聞く）面白味がなくなってしまうので、ここで筆を止めることにする。落語会でこのネタがかけられると、サゲの後で目頭を押さえているお客さんを何人か見ることがある。困っている人を見たらなりふり構わず助けの手を差し伸べる。だがその親切が仇となり次の問題を引き起こしてしまう。そしてその対応にもまた・・・と人情が人情を呼び厄介なことになってしまう。そのあたりの「人情の機微」を上手く表現しないと、この噺の心は伝わらない。だから、心が伝わればこそ、観客席に目頭を押さえる人が出てくるのだろう。

この落語を聞き終えると、落語の中の情景が脳裡に浮かぶのとは別に、「ある映画」を思い出すことがある。それは・・・

第二次世界大戦後のイタリアが舞台の映画。ナポリ娘のジョバンナと出征間近の兵士アントニオが、12日間の休暇を利用して結婚する。

入隊したアントニオは早期除隊を目論んで精神疾患を装い精神病院に入れられるが、仮病がばれて懲罰を受けてロシア戦線へ送り込まれる。「毛皮を土産に」とジョバンナと約束して戦地へ旅立つ。

戦地でのアントニオは、敗走中に極寒の雪原で倒れて瀕死の状態に陥るのだが、村の娘マーシャに助けられて一命を取り留める。自分の名前も思い出せないほどに記憶も喪失してしまったアントニオはマーシャの看護により少しずつ回復して、やがて二人は結婚する。

一方ジョバンナは、戦争が終っても帰ってこないアントニオを心配して色々情報を集め、夫の属した

隊の足取りを辿って旅に出る。

艱難辛苦の旅の末辿り着き、アントニオと出遭うことが出来たのだが……。

映画の題名は「I Girasoli (ひまわり)」。ヴィットリオ・デ・シーカが構想に10年を費やしたと言われる作品で、マルチェロ・マストロヤンニとソフィア・ローレンが主演、ハリウッドから参加したヘンリー・マンシーニが音楽を担当した。

心の内面に深い傷や痛みを抱える男を演じたら当代一(私の個人的感想)だったマルチェロ・マストロヤンニが好演をして、作品の持つ空気を作り上げていた。

また、陽気なナポリ娘が妻となり、やがて不幸を背負うことになる女性を演じたソフィア・ローレンがこれまた素晴らしかった。

ソフィア・ローレンのあの大きな目に涙があふれて流れ落ちる場面は、「戦争がもたらす不幸」を象徴するようで、戦争シーン以上に迫力があつた。

「万両婿」は、追い剥ぎに襲われた男が旅先で急逝したというだけの噺なのだが、登場する二人の男をとりまく事件に発展していく。「ひまわり」は戦争で離ればなれになってしまった夫婦の間に起きてしまった事件を深く掘り下げていく映画である。

背景も異なり、筋書きも異なり、二つの作品の間には共通項は何もない。私にとっては、「好きな落語」と「好きな映画」ということだけなのだが……。

にもかかわらず「万両婿」を聞くと「ひまわり」を思い出す。なぜだろう。

以上

